

僕達の未来

【時の迷い子】

ーきいろいおさかなー

五時ちょうど、携帯電話からお気に入りの曲が流れ出すと共に、いつもの如くの日が始まる。

メガネを掛ながら妻の寝顔を覗き込み寝室を後にする。

個室を2軒ハシゴして、朝の儀式を済ませスッキリとしてキッチンに辿り着く。薄切りパン2枚をトースターに放り込み、豆乳と烏龍茶をレンジで2分温める。冷蔵庫の扉をあけてタマゴを焼くかハムを焼くか、ちょっと考え両方をフライパンに放り込む。

程よく焼けるとトースターが「チン」と鳴ってレンジが「ピピッ」と続く。

いつもの如く。

そいつを抱え自分の部屋へ行き、ファンヒーターとパソコンのスイッチを入れ席に付く。

4月ともなれば、室温二十度に設定されたファンヒーターは直ぐにおとなしくなってくれる。

私はマウスを動かしながら、パンとパソコンにかじりつく。

画面に映し出されるニュースの文字は、いつもの如くの『異様な殺人事件』、『飲酒事故』、『テロ』、『官民揃っての不祥事』、
いつもの事とは言え滅入っちゃう。たて続けにスポット天気、メール、それから、お気に入りのクルマのサイトを楽しんで最後に自分のホームページをチェック、ちょっと気が晴れる。
いつもの如く、いつもの如く。

携帯電話お気に入りの2曲目は出勤の合図、
服を着替えネクタイを締め朝食の皿を再び抱えてキッチンへ逆戻り。
「オハヨーッ」と、妻は食器を洗いながら、
「午前は小学校の父母会、午後は中学校で役員決め、あなた、今日も遅いの？」と矢継ぎ早や...
...これも、いつもの如く.....
「いや、＼明日のお楽しみ＼があるから昨日少し頑張って大方メドを着けておいたんだ。だから今日は早めに帰れるし、この土日は久々に気兼ねなく休める」と、返事をし居間へ目を向ける。

「オハヨウ」と、声を掛け合うが、娘はメールに、ボウズ達はカード対戦ゲームに夢中の様子。
「克幸ィお前さぁ、明日の入学式の準備とか中学校の用意とか大丈夫なのォ？」
「ダイジョブ、ダイジョブ、みんな、お母さんがやってくれてるから。ねえ。」と、相変わらず
人任せ、下の息子は、
「お父しゃん僕ねェ、今度4年4組、しかも4番でゾロ目だよ！
先生はねェ男で名前はン〜ッ 忘れた。」
〃 ふ〜っ大丈夫かいなあ、、、〃
「美幸いつまでメールしてるんだ、どうせ直ぐ学校で顔合すだろっ、バス来るぞ！」
「今終わるよお、行くって。」

玄関のドアを開けると春の柔らかな日射しが暖かく、とても心地良い。

「我が家の櫻もそろそろ咲きそうだね」

「他の所は咲き誇っていますけどね。」

「微妙な日当たりのせいかな、土かな？」

「どうなのでしょうかね？」

「なあ母さん、美幸さあいつもバス停に走ってきて、ぜいぜい言いながらバスに乗り込むの何とかならないのかねえ！？スクールバスだから少し待って居てくれるけど、いつも横目にハラハラさせられるよお！」

「毎日言っているのですけどねえ、、克幸も秀幸も今度から小中学校別に通うから少し自覚してもらいたいものね！」

「ん～そう願いたいね、、、じゃネエ」

「ハイ、気を付けて、行ってらっしゃい。」

道路まで妻に見送られ、いつもの如くの出勤。

「アッ、お母さん携帯借してよ、お父さんにソフトの事で聴きたい事あったんだ」と、対戦ゲームを途中で放棄。

「ずるいぞっ兄ちゃん 負そうだからって」

「ちげーよォ、ホントに聴きたい事あるんだって、姉ちゃんのデモいいぞッ」と、言いつつ母の元へ。

「今、行ったばかりよ、直接聴きなさい。ついでに秀幸を途中まで、連れて行ってちょうだい。ホラっカバン、美幸もいい加減にきなさいよ！お父さんバス停でいつもハラハラして見ているって言ってたよォ！ ホラホラホラッ」

結局、三人は母親に尻を叩かれて、家をおん出される。

「チッ僕は学校明日からなのにィ、、一一、それにしてもさぁ姉ちゃんばかり良々よな 携帯持って、僕達も欲しいよなぁっツ」

「そだ、んだっ」、秀幸があいづちを打つ。

「あんた達は直ぐそこの学校に行くのに、何にも要らないでしヨ、私は護身用よ！」

「何言ってるんだい、姉ちゃんだってスクールバスで高校往復するだけじゃん。今時、自宅前からだって連れて行かれちゃうんだぞ。　ホラホラ、ねーちゃん、お父さんバス停で睨んでるぞっ！」

「何言ってるのよ、こっち見てるだけよ」

2人のやり取りをよそに秀幸が突然に大声をあげた。

「あ～～ッッ、お父しゃんっ！」

「キャーッ」　ガコ！

「うわあ～」　キーッキ～ッツ・・・・・・・・バーン・・・・・・・・

異様な音と悲鳴が飛び交う。

目の前の通勤通学の人波へクルマが突っ込み、スピードが緩む事無くバス停の方へ。

「なッ何ちゅう事を！」

近くに居た小学生を、とっさに抱きかかえ身構える。クルマは数人を薙ぎ倒し電柱にヒット、ケツを振って目の前へ・・・・・・・・

『当たる！』と、思った瞬間から、ゆっくり時間が流れるように感じた。

近づいて来る運転手は、 若葉マーク、ハンドルと携帯を握りしめパニック状態のサラリーマン、その後方に倒れている人達、寄り添う人達、駆け寄る人達、さらに後方に見えた三人の我が子達の不安そうな表情、そのひとりひとりと目を合せる時間があった。

その後カラダに軽い衝撃が――

飛んだ・・・・・・・・

そして、青空が見えた・・・・・・・・

ギラギラ の 太陽、、、

白球 が 舞った、、、

オ～イ 大丈夫かァー？

おーーいいっ・・・・・・・・

病院の面談室に医者はカルテを持って入ってきた。

「君達お父さんの所に行って良いよ。でも眠っているから静かにね。」

そう告げてから、

〃 奥さん大丈夫ですよ気をしっかり持って下さい。

お聞きになっているとは思いますが、こちらのお嬢さん息子さん達、その他、目撃者の証言によれば、佐山さんは子供を抱えて最後にクルマに当てられて数メートル飛ばされたみたいです。佐山さんのおかげで子供はケガも無く、佐山さん自信も外傷はほぼ有りません、脳波も異状は診られ無いです。

ただ、ショックのせいかどうか？眠り続けています。今の所は、まだ、さほど時間が経っていないので無理に起こさない方が善いかと思い様子を診ています。〃

「兄ィちゃん、お父しゃん眠ってるね。」

「ああっ静にな！ アッ 起きた！」

・・・・・・・・見覚えの無い天井・・・・・・・・？ ん、誰か 僕を覗き込んでいるのか・・・・・・・・

目がぼやけていて良く見えない、、、

どうしたんだ・・・・・・・・

あっ、そうかぁ そうだ。

「君達 だれ？」

「えっ 僕は克幸、こっちは秀幸だよ！わからないの？」

「わかんないっ、それに顔がぼやけて良く見えないんだ。」

「アッ メガネ メガネ」

〃 エッ、メガネ？メガネなんて掛けた事無い、、、なに、〃

〃 その子に掛けてもらった先に、何故かハッキリ顔が見えた。でも、この二人は誰なんだ。〃 〃

お父さん交通事故に遭って、今病院に居るんだよ。〃・・・・・・・・って・・・・・・・・

〃 交通事故ォ 〃

何を言っているんだ、この子は？

「僕はボールが頭に当たって、、、あれ？

頭痛く無いぞっ、、、、

それにお父さんて何ィ？！ 僕の事！？」

「にィ兄ちゃん、」

「、、、こい、秀幸っ！」

2人の子供は、血相を変えて病室から駆け出して行った。

カラダが痛い、

いったい誰なんだ、 あの二人 ？

〃 んっ、、、〃 出て行ったドア横に貼ってあるカレンダーに眼が止まる。

〃 2010うへへい、せ？ い、、、

二十二年 四月って 何にィ！？

今、八月だぞっ夏休み。〃

慌ててベッドから降りると何故か視線が高く、クラついた。

「ワっ なんだ！」バランスを崩しベッドに手を衝いた。と、同時に突然横目に、おじさんの姿が飛び込んで来た。

〃 ギョッ〃 としてとっさに目をそらす。

「エっ、、、、、、」

誰も居なかったのに、どう言う事だ！？

心臓が高鳴る。

恐る恐る顔を向けた先に、鏡に映るおじさんの姿。

「えっっ 誰！ 僕かぁ～？？ 」

自分の手のひらを覗き込むと、僕と同じ動きをする鏡の中のおじさん。

「わぁっっ 何なんだ、このカラダっ どうしたんだ、何でおじさんなんだぁ！」

突然、頭の中が言い様のない、よじれた感じになり、ムカムカして脂汗がドッと吹き出した。そして思わず、ベッドの脇に有る洗面台に駆け寄り、顔を埋め、そのまま、しばらく嘔吐を繰り返し、その場にへたり込んでしまった。

〃 何故 〃 と、

〃 どうしよう 〃 が、頭の中で、繰り返し、繰り返し、駆け巡った。

〃 まずいっ 〃 と、とっさに、ヨロヨロのカラダで病室を出た。

「お母さ～ん」

「お父さんが、お父さんがねえ」

「病院なんだから、走らないの、静かに。お父さん起きたの？」

「起きたよ、起きたけど、僕達の事がわからないみたいなんだよお」

「大丈夫、泣かなくていいのよ！」なだめ透かしながら、みんなで病室へ駆け出す。

病室はもぬけの殻、半開きのロッカーに眼が行くと靴が無い。

主治医が看護師に指示を出す。

〃 医院長と警察の方に報告を、まだ事情聴取しているだろうから。大至急、近所を捜してもらうように！〃

「御自宅は、どの位ですか？」

いや、、、今の段階ではなんとも言えませんが、御主人は混乱されていると思うので、自宅へ向かわれるのではないかと考えます。」

「5キロ位でしょうか、お金も携帯も持って無いようですけど。」

「そうですか！ここから帰りそうな道のりを捜してみましよう、、、私と看護師も後を付いて行きます。」

「解りましたヨロシクお願いします。」

「大丈夫です、気をしっかり持って御主人は歩きですから、慌てず落ち着いて行きましょう。」

公園の水道でまた戻す。もう吐き出す物は無いけれど、水をガブ飲みしてまた吐いた。

が、少し落ち着いた。

＃ん、、、この公園、こんなに狭かったかぁ？木がすごく高くなっている、、、？

どうなっているんだ辺りをよく見渡すと街の雰囲気が全然違う、、、見た事のないクルマばかり、、、

だいたい宮城とか仙台ナンバーっていったい何なんだ？

自宅の玄関は閉ざされていた。

看護師が病院と連絡をとってみるも、病院の周辺を捜している警察からは、まだ発見の報告はないようだ。

医者が他に行きそうな場所を訪ねた。

「行くと言っても何も持ってないですからねえ」と母親が答える横から秀幸が口をはさむ。

「ジィちゃんの所だよお！きっと。」

「御実家ですか？、、、近いのですか？」

「ええ、ここよりは病院から近いです。」

「では、連絡をとって行ってみましょう、、、そうですね、、もしもの事もあるかも知れないのでお嬢さんとうちの看護師を、こちらに残して向かいましょうか。」

「無い！・・・・・・・・ 家が 無、、い、、、、」

〃二階建ての家になっている・・・

なんでだあ、、、、隣は、空き地だったのに、、、、家が建っている！

・・・・・・・・なんだこのクルマ？ワーゲンマークが付いている？ビートルの訳ないけど、、、、カスタムビートルか？仙台300ナンバーって何？〃

一佐山一 玄関の表札が目止まる。

「さやま、、、、！」

恐る恐るチャイムを鳴らす。

出て来たのは、見知らぬおばあさんだった。

「あらっ、幸雄いらっしゃい。どうしたの、顔色悪いじゃないの？」

「えっおばあさん、僕が幸雄って何で知ってるのオ、！ おばあさん誰？」

おばあさんは、不思議そうに、

〃何で知っている？今さっきお前が来るかも知れないってだけ、美子さんから電話があった〃と、言う。

「ヨシコ？ ヨシコって誰！」

おばあさんは、僕の対応に慌てふためいて、奥に居る誰かを呼んでいるようだった。

現われたおじいさんを見て凍り付いた。

「うそお・・・　・・・おじいさんっ　なんでエ　死んだはずのおじいさんが生きているうッ」

「何だ　幸雄！　親に向かって死んだって　何を言っているんだァッ！縁起でも無い。」

「ジィちゃ〜ん」と、後ろから声がした。　さっきの子供達が、おじいさんに駆け寄る。見知らぬ女の人と白衣は病院の先生かァ？なッ何なんだといったい、どうなっちまってンだよォ、、、

おばあさんが、先生らしき人と見知らぬ女の人に、僕の事を話しているようだ。

みんな不思議そうに僕を見ている、、、

「なっなんだよお！僕だって、僕じゃ無いんだぞッ本当は、どうなってンだか、こっちが知りたいんだ。世の中どうなっちまったのか、この僕のカラダも、どうしておじさんになってしまったのかぁ！・・・　・・・？」

「佐山さん落ち着いて下さい！私は大学病院の医師です。あなたの主治医です。」

医者らしき人が諭すように話しかけて来た。

「大丈夫落ち着いて、、、大丈夫です。」

「 」

「ありがとうございます」そう言ってから、

「すみません私の質問に答えていただけますか？」と、その言葉に促され、うなずき医者と向き合う。

その行動に注目しているような周りの人達。

「いったい何が、、、」

「それではお名前を教えてくださいませんか」

「えっ ハイ、佐山 幸雄です。」

「そうですかあ、、、」

拍子抜けする質問、しかし、その答えに、

「ホッ」と、するような周りの反応。医者は全てを飲み込めたようなそんな表情に見えた。と、同時に、また質問をして来た。

「それでは、今一度教えて下さい。あなたのお名前と年令を。」

「えっ、ハイ 佐山幸雄 十二歳です。」

いったん病院に戻り問診した後に僕は家族らしき人達と再びクルマに乗り込み病院を出た。

「着いたよォ」の声に、クルマを降りる。

ここが、僕が住んで居る所なのかァ・・・・・・？

二階建ての家はすごく大きく見えた。

「お母さん、幸恵おバちゃんのクルマ」

「きっとお父さんの事心配して来たんじゃないかな！」

〃サチエおばちゃん？、、、幸恵？僕の妹と同じ名前だけど、、、偶然？

よくある名前だからなあ・・・・・・・・〃

「入って」の声に促されて、

「おジャマします。」の返事に、三人の反応は、なんとも言えない表情に見えた。

「美幸、帰ったよォ。」

「ねーちゃんただいまァ、幸恵おバちゃん来てるのォ？」

その声に奥から、二人が現われた、と、同時に思わず〃ぎょ〃とした。

—— お医者さんの話しによれば、交通事故で外傷、脳、共に異常は無いけれど、クルマの当たり所か、そのショックか？、何らかの原因で、お父さんは十二歳の夏休みに野球のボールが頭に当たって倒れた以降の記憶が無くなっているらしいの・・・

見た目は大人だけど、中身は克幸と同じで十二歳の中学一年生って言う事なのよ。

お医者さんが、〃 例え話 〃 として言っていた、十二歳からの記憶が無くなっているから突然三十三年後の未来と言うか、現代にタイムスリップした様なものじゃないかって！
だから今、観る物、聴く物、つじつまが合わないって事なのね。世の中一変しているから戸惑って当然ね。

なので医者は、普通に生活ができるから、入院しているよりも、日常生活の中に居た方が刺激が有って記憶を戻すキッカケを掴み安いかもしれないと言う事なのよ。

それで、明日とりあえず報告に行って、その後いろいろ考えて行きまじょうと、言う事になった訳なのよ。
――

サッチィ？は泣き崩れた。

女の子は突然声を荒げ取り乱した。

「これからどうなるのォ、お父さん働けなくなって、学校とか生活とかァ、どーなるの」

「そんな事、今言う事じゃない」お母さんが、制止する。

重苦しい空気に包まれた。

僕、この人達のお父さん．．．．．なのか．．．．．

でも、見た目だけ、

窓に映る自分の姿を見て頭を抱えた。

「ごめんなさい」と女の子は、泣いていた。

＼ どうしよう、どうする事も出来ない... 〃

お母さんは女の子を抱きかかえて、なだめていた。

「お父さん、アッ！えっと、幸雄君、僕達の部屋へ行こうよお！お母さん良いでしょッ」と、男の子が誘いをかけた。

＼ そおね、そおしなさい 〃、お母さんの返事に促され三人で居間を出て階段を登った。

「二階ってカッコいいネ、僕初めてだよ。」と、話すと、二人は驚いた様子だった。

「おと、アッ幸雄君、ミニカー見せてあげるよ、クルマ好きでしょ」の問い掛けに、どうして知っているのか聞き返すと、

「お父さんクルマ好きだから、十二歳の時はもうクルマ好きかなとァと思ってさぁ」と、理解するのに数秒を要したがるほど納得。

「今みんなスーパーカーに夢中だよ！僕はねフェラーリ３０８ＧＴＢとＦ１のエルフトイレルが大好き、あの６輪タイヤがカッコ良いんだよね。ミニカーは５台持っているよ、なかなか欲しくても買えないよね、お小遣いも決まっているし。」

部屋に入ってビックリした、そこはミニカーだらけだった。

「すごいねぇ」

「お父さんが、アッ・・・・・・」隣から、弟？が口をはさむ。

「ユッキィがねぇ、お土産に、いつも持って来てくれるんだよォ」と、得意げに話す答えに驚かされる。

「僕があ・・・・・・・・」

「缶コーヒーに付いているんだよ、オモチャ屋で買ってもらうのもあるけど、このちっこいやツは、み～んな缶コーヒーのオマケなんだ。」

「缶コーヒーに付いてくるのォ？缶コーヒーって大人が飲むモノだよネェ、それにミニカー付いてくるんだ。それって僕達がライダーズナック買うみたいなもの？ 大人もミニカー集めするんだアツツ、何か不思議！」

〃それにしても、知らないクルマばかりだ〃

「これカマロみたいだけど、違うなぁ何ィ？」

「これZだよ」

「エ～これZなのォ、」不思議そうな僕の表情を見て、何か探し始めた。

そして、〃あったあった、〃と言って一台のクルマを差し出した。

「幸雄君、これでしょZ！」

「そーそーZ 4 3 2！これがZでしょォ！」

「モデルチェンジしてるんだヨ、だってこれから三十年だヨ、5、6回は変わってるはずだよ。」

「そーなのォ？　へ～っっ、、、　こっちのクルマは葉巻みたいで変わったカタチだね」

「これはプリウス、ハイブリット車だよ！」

「プリウスハイブリットって長い名前だね！？」

「ちがうちがうよ！ハイブリットっていうタイプのクルマだよ、んとねえガソリンと電気で動くんだよ」

「ええエンジン二個付いているって事ォ！？」

「そそっエンジンとモーターで走るんだよ！幸雄君さっき乗ってきた僕んちのクルマもねエスティマって言うハイブリット車なんだよ静かだったでしょ！？」

「えっそうなの、、、緊張していて静かだったかどうかは解らなかったなあ、、、　それよりもすごく大きくて三列席があるクルマなんて初めてだったからそっちの方にビックリしたよ。」

「今時は電気自動車もあるんだよ！」

「うそお電気自動車あ電気自動車って遊園地にあるようなアレ！？」

「遊園地にあるあれ！かどうかは解らないけどでっかいバッテリー積んでモーターで走るよ！自分の家で充電出来るんだよ！」

「うそお、、ホッホントなのお！？」

「今は地球環境が悪くなっているからそんなクルマの開発が盛んなんだァ僕が思うに後十年したらガソリン車とかハイブリット車とかみんな電気自動車になっちゃうよ。」

「そ〜なんだ、、、信じられない。」

「フッフ幸雄君の受け売りだけどね。」

「僕のオ！？」

「ああお父さんねクルマ大好きだから、クルマの種類だけじゃ無くてクルマについてイロイロ教えてくれるんだよ、だから僕もクルマ大好きなんだ！」

「そ〜なんだ、これまた信じられない。」と、同時に「ふう〜」と何故か溜息が出た。

そんななか知っているクルマが目にとまる。

「あっ、こっちのガラスケースに入っているコスモスポーツとか１１７クーペ僕の持っているヤツと同じだ。 特別扱いだね！なんで、大切なの?? 」

「これ幸雄君のだよ、僕達にくれたんたよ、十二歳の時もう持ってたんだ。」

「えっ僕のなのォ？」

「今、これ二千元くらいしちゃうよ！」

「エーッ二千元！なんで、この前２２０円で買ったばかりだよ。」

「ちがうちがうよ、三十年前だよ。今はさあ、コレ欲しくても手に入らないから、プレミアが付いてるんだ、幸雄君モノ持ち良いからさあ、けっこうするんだよ、この手のヤツ。」

「この手のヤツ、、、、って何?・・・・・・・・」

「さっき言ってたライダーカードとかさあ、ソフトビ人形とか持ってるでしょ！」

「ソフトビ人形って？」

「ウルトラマンとかゴモラとか。」

「あッ、ミニ怪獣の事！」

「そー、それぞれ、今、いくらだと思う。」

「えっつ、いくらってえ、、、ん～。全然見当付かないけど、ミニカー十倍くらいだから同じとして、六十円だから、ろっ、ろっつぴゃく円しちゃうのォ！まさかね。」

「ブubb～ッッ、何と今、モノによっては、五千円もしちゃうよ！」

「ええ～っつ 五千円！ だってえ！！？」

「そうなんだよ、幸雄君が当たり前に買っていたオモチャとか、そんなの専門に扱って売り買いしてる中古屋さんがあるんだよ。」

「ホントにィ～。・・・・・・ミニ怪獣が五千円で、このミニカーが二千円、、、、どーなってるの、信じられないよ・・・・・・」

かざしたミニカーの先に、壁にかけられた、ビートルのイラストが目止まる。

「あっこれ、うちのビートルだ。」

「コレすごいよねえ、幸雄君が描いたヤツ」

「えっ？僕こんなの描いてないよ。」

＃でも、ホラッ、ここ、ここ＃と、男の子が指差すイラストのサインには、
はっきりと、 1991, 6, 16. Yukio. S. と、書き記されていた。

「僕がァ、 こんなプロみたいなヤツ、、、、？ 1991年って、エ〜と十四年後かァ？
――・・・んっ、ちがう！ ん〜と十九年前って分け！

でもなあ、信じられないよォ！ 僕、今、全然絵なんてうまく描けないのにさ、これから、才能が
、目覚めるのかァ？」

「そーゆー事なのかなあっ」と、男の子も、不思議そうな顔をした。

「ユッキィね、何でもサラサラと、絵とか、描いてくれるんだよ」と、弟も付け加える。

何か、言い様のない感覚に、背中が、＃ゾゾッ＃と、した。

「あのさ、このクルマなんだけど、どうなったか知っている？」と、聞いてみた。

「さっきの家？にワーゲンマークのビートルモドキみたいなヤツ停まっていたけど・・・」

「あれニュービートルだよ、ジィちゃん前のビートル手放して何台か乗り継いで、最近アレにしたんだよ。」

「ヘエやっぱり、あれビートルなんだ。でも前のは、手放したんだ・・・」

さすがに、ちょっとガッカリした、

男の子は、僕の表情を気にしてか、にこやかに、話し続けた。

「手放したと言っても、それを幸雄君がジィちゃんから譲り受けて乗ってたんだよ、僕、乗せてもらった記憶があるんだあ。

「シュパ、シュパ、シュパ〜ッ」って、独特の音が、好きだったなあ。二十年以上乗ってたみたいだよ。秀幸が産まれる時に、

「さすがに5人じゃきついかあ」って、泣く泣く手放したって、前に幸雄君に聞かされてたよ。」

「僕がビートルを運転していた、、、

僕が運転出来る・・・す、すごい、、、けど。」すごい、、けど、信じられないよ・・・・・・・・

「ユッキィ、クルマの運転うまいんだよ！」

「うまいんだ？・・・って言われてもなあ・・・・・・・・、 どうなのかなぁ？・・・・・・・・フ〜ッ・・・・・・・・

あっ、ねえねえっ、こっちの僕が描いたらしき、読めないけどさ、なんだかRoadsterってオープンカーすごくカッコ良いね！これは、どこのクルマなの？」

「これ、ユーノスロードスターって言って、マツダのクルマだよ。」

「エ〜ッ、ホントにィーッッ！！」

「これ幸雄君のクルマだよ、下ガレージにこのクルマがあるよ。僕達が、生れる前に幸雄君とお母さんとで、買って乗ってたんだよ！」

「ウッソ〜ッッ！ このスーパーカー見たいなヤツが、下に在るの一、み、見たいィ！」

〃行こう行こう〃の、声に誘われて、三人で階段を駆け降りて、駐車場へ。

「お母さんにOっKもらって来たよ。」

「いいのォ、ホントォ！」 早る気持ちを、押さえられない。

ガレージのドアを開けると現われた黄色いクルマは、こぶりでピッカピカでスゴイカッコ良い。

「カッコイイ〜ツツ！！」

「幸雄君思い出せないの？」の、セリフに全然思い出せない自分が居て、ついこの前、初めて我が家にやって来た、ピッカピカのビートルの事を思い出していた。

そして、胸になんか込み上げて来るモノを感じた。

〃 本当なのかぁ、これを、僕が買って運転して・ ・ ・ ・ ・

しかも、ビートルと出会って三十三年も経っている。

僕は本当にこのカラダの大人なのか？

だとしたら・ ・ ・ ・ ・

玄関から声がした。

「克幸ィ、もうすぐ夕食だから、お父さんッじゃ無くて幸雄君をお風呂に案内してあげてちょうだい。」

「エッ僕お風呂入いんの、ご飯前に？」

「そうだよ、おフロ入って、ごはん、会社から帰ってもおフロ入って、ごはんだよ。」

〃会社、 仕事している・・・・・・・・〃

〃ここだよ〃と、案内されたドアを開けた。何？この大きい白い箱？もしかして洗濯機？でも横に扉、、水漏っちゃうよなあ、、

そんな疑問は一瞬にして吹き飛んだ、裸になった自分の姿に改めて愕然とした。

〃これが本当に僕なのかぁ！〃

克幸君より頭１個以上大きいからなあ、、、１７５センチは楽に有るか？チンチンにも毛が生えていて、スネ毛もあって、これが僕？ぼくは１４９センチで、ツルツルで・・・・・・・・

湯舟に漬かりながら、ドヨお～ンとした。

〃 ピピッ 〃 と、音を発して、目の前のランプが光ったと同時に、
一追い炊きを、開始します。ー〃 ピーッ！ 〃
「わあっ、風呂が喋ったァ！」

さっぱりして居間に戻ると、みんな隣のテーブルを囲んでニコニコして僕を待っていた。

「さァここに掛けて、慌ただしかったから、カレーにしたのよ、ビールにします！」

「えっ、僕ビール飲まないです。」

「そォ、ちょっとドキッとしたかな！」と、笑っていた。横から、

〃 ユッキィ毎日ビール飲むよ、ビールって言っても、発泡酒だけどねっ！ 〃 と、得意げに説明が入る。

「僕が毎日ビールを飲む！」

＃ 本当かァ、しかも発泡酒って何だ？＃・・・・・・

「アレ、僕の所にだけあるこの卵は何い？」

「ユッキィいつもゆで卵カレーに入れて食べてるよ！僕もたまに真似してそうするけど。」

「エッ僕そんなふうにして食べた事無いよ！」 みんなキョトンとしていた。

「アラいつからかしらねえ、、私が知り合った時にはすでにそうやって食べていたけど」

・・・・・・

本当にそんな事をして食べているのだろうか、、、、とても信じられない、、

みんなで「イタダキマァス」と食べはじめると直ぐに

「こら秀幸！玉ネギよけないで食べなさい。」

下の子が、おこられてシュンとなる。

「秀幸君タマネギ嫌いなの！」の言葉に、うなずく。

「僕はねカレー好きだけどニンジンがダメなんだ、いつも鼻つまんで食べているよ。」

「エ〜っ、そーなのーッ？」って、みんな、不思議そうに、口をそろえた。

お母さんが思案した様子から、少し笑って話しをした。

「幸雄君、それ鼻をつままなくとも食べられるよ。ダマサレタと思って、ひとつ食べてみなさい。」

一瞬、＼ドォエ〜ッッ＼と、思った、けど。ここは、やるしかないヨなァッ、と、覚悟を決めて、鼻をつままずに目を＼ギュッ＼と、閉じてニンジンを口に放り込んだ。

「ウマイッ！」

お母さんだけ笑った。

「ホントにこれニンジンなのォ！　ぜんぜん臭く無い、甘くて美味しいよォ！」

「ニンジンじゃ無いカモねえ」の、お母さんの返事に、みんな驚いた表情をした。

「三十年前のニンジンと、これでは、形や色が同じでも、きっと別物かもね。」と、柔らかな口調で話しをした。

だけど、意味が全然解らなかった。

「エッとォ」と、僕は、切り出す言葉を見つけられずにいた。

「あのお、教えて下さい、皆さんの事、いまひとつピンと来ない所もあるので。」

「あ、そうねえ」と、お母さんが、速効で話し始めてくれた。

「私は、佐山 美子で幸雄君ン？ この場合は、あなたの妻」かな、一

こっちが長女で、美幸 高二。次が克幸 中一・・・」

「みんなカッチって呼ぶよ。」

「僕、秀幸、秀だよ、ユッキィ！ 小学校の四年生だよ。」

なるほど、みんな〃幸〃が付いている・・・・・・

フ〜ッ、僕の子供と言うかとかア、、、、

〃僕はこれから、どうしたら良いですか？〃の質問に何の曇りも、迷いもないかの如く
「ここに居れば、良いだけよ。」と、返事が帰って来た。

僕はうつむいたまま話しを続けた。

「僕、働かないと、いけないですよねぇ。」とは、 言ったもののどうしたものかと考えて
いた、、、、中一じゃ会社で働ける訳が無い、、

「子供は、働けないわよ。」

「そうそう、中一じゃ、働けないって！」

「ンダ、ソダッッ」

「そだ、んだっ！」

笑顔で順番に返事が帰って来た。

言葉がもう続かない、、、、

〃美幸、天気予報テレビつけて〃の、お母さんの声に壁に掛けてある、でっかいガラスの板が光
ったかと思うと、なんと映像が映し出されたではないか！

「エ〜ッこれテレビなの！」

画面のデカさにも、ビックリさせられたが、テレビの薄さが信じられなかった。

そして、ビックリも、つかの間、もう一台のテレビが目に入る。

「どーして同じ部屋にテレビ二台有るの？」

「こっちはパソコンよ」と、笑って美幸さんが、スイッチを入れる。

「パ、パソコン？、、」 驚く間もなく、そこに映し出されたものは、なんと、さっき観た僕が描いたらしき、ユーノス？ロードスターのイラストだった。

「な、なんでこれ、テレビに映っているの？」

「ユッキのホームページだよ」 カッチが答える、ドビックリの連発に、だんだん頭が三角になってきた・・・・・・・・

ホームページの説明を聞かされるが、理解不能。

そんな事をしているうちに、何処からともなく聴いた事のない音楽が流れ出す。
美幸さんが、その音楽の鳴っているモノを、耳にあて話し始めたではないか？！
「それっ、、、
それってエ 電話なのォ～っっ！」…………

お母さんと美幸さんが洗いモノをして、カッチと秀ちゃんが風呂に入っているあいだ、僕はプラズマテレビなるモノに釘付けになっていた。それはテレビが珍しいからでは無くて七時のニュースから送りだされる
一子供が親を殺す。～
親が赤ちゃんを、置き去りにする。～
自爆テロで何十人と死んで逝く。～
〃 ホントなのかぁ？ 〃

学校帰りに、人攫いに遭う。

恐くて動け無かった。何処にも行き場が無くテレビを消す訳にもいかず、カラダが縮こまり手に汗をかいていた。

風呂から上がって来た秀ちゃんが声をかけてくれた。

「ユッキィどうしたの震えてるよ寒いの？」

「えっ、あっ、そう・・・」と、ごまかした。

それと、同時にテレビが消えた。

「幸雄君今日は、いろいろ有り過ぎて疲れたでしょう。ゆっくり休んでちょうだい。」

お母さんが部屋に案内してくれた。

〃心配しないで、また明日〃と、笑顔で言われた。

ホテルの部屋みたいだった、ベッドが二つ並んでいて身の置き場に戸惑ったが片方のベッドに腰掛けた、と同時に、カラダがベッドに崩れ落ちた。

天井がすごく高く感じた。そして、しばらくの間、天井の模様と、にらめっこが続く、カラダがクタクタなのに眠れない。

．．．．．んっ、眠ったか？

20：14、、、時間が全然動いて無かった、、、

僕はこれから、どうすれば．．．．．

カラダが大人だって、ただの中学一年生じゃどうしようもない、、、どうすればいいんだって考えても何も出来やしないじゃ無いか、、、本当に大人なのか、それさえ信じがたいのに、、、窓に写る自分の顔は良く見ると、、、確かに未来の自分の様にも見えなくは無い、、、
「はあ、、、はあ、、」

息が荒くなり　　またムカムカしてきた、、

左の腋の下をひと雫の汗が流れた。

「ウグうっ、、」ベッドから飛び起き部屋を出てトイレに駆け込んだ。

「どうしたの大丈夫？幸雄君」

「．．．．」

「ユッキィ、、、」

見上げるとみんな心配そうな顔をしていた、、、

お母さんはみんなを部屋に戻し着替えを持って来てくれ介抱してくれた。

台所に連れられてコップに水をいっぱいもらいうがいをした。椅子に座るとスポーツドリンクって書いてある変な透明な容器に入った飲み物と四角いお菓子を二ヶもらった。？

お菓子はボロボロこぼれるし飲み物は何か薄くて甘塩っぱくて変な味だったが栄養があるら食べてねと言われたので食べたけど、、どうなんだろう、、これ？

しかし少し落ち着いた。

「眠れない？眠れないよねえ」との問いかけに

僕はうなずく

「外の空気でも吸って来る？」

又うなずく

「じゃ着替えて！」とGパンと革ジャン帽子に手袋を渡さちょっと待っていてと言ってお母さんは部屋を出ていった。

？そんなに外寒いのかなあ、、と思ったが言われるがままにそれを着込んだ。

ほどなく声が掛かり玄関を出ると何とガレージから表にユーノスロードスターがオープンの状態で停まっていたので思わず声を上げた。

「すごいっ！！」

「いきましょう載って。」の声に促されて助手席へ乗り込んだ。

リトラクタブルヘッドライトが”ガコッ”っと音を発して開き道先を明るく照らし出した。シートベルトを締めゆっくりクルマは滑り出した。

街の灯が直ぐに終わり外灯と桜の木が交互に迎えてくれた。

「スゴイ！空　　桜も星もォ」

「それ私のセリフよ！」

「えっ？」

「普段はこのポジションは有り得ないのよ、幸雄君がこっちで運転を楽しんで私は星空を楽しむのよ。」そう話した。

「やっぱり運転出来るんだ、、、秀ちゃんにも言われた。」

クルマは以外にも暖かくビックリしていた。

「運転する！」

「ええ、、」意外なセリフに戸惑った、、

「僕運転なんか出来ないですよ。」

「ハイ免許証」

差し出された免許証は確かに今の僕の顔と同じ写真で名前は佐山幸雄と書いてあった、、、僕は助手席に座り続け風になって流れるパノラマを眺めていた。お母さんはその後黙ってハンドルを握り続けた、、、

小一時間位経っただろうか、、、お母さんは玄関前で僕を降ろすと、クルマ片付けていくから先にいっていて良いよ服は部屋にまとめておいてと言いガレージを開けた。僕はお礼を言って部屋へ戻った。オープンカーの興奮は冷めないような、、、でもなんだか落ち着いたような、、、

でも何となく・・・・・・・・

素直に喜んでいない僕がそこに居た・・・・

「、、、、はぁ」やはり眠れない、、

僕は枕を引きずりながら部屋を出た。

階段を登りかけようとした時、食卓のテーブルの所で、お母さんが泣いている姿が目に入った。

・・・・・・・・

どうすればいいんだ・・・・・・・・

本当に何も出来ない、

、、、、声すらかけられない、

カッチ達は、まだ起きている様だったので、ノックをして部屋に入れてもらった。

「幸雄君、どうしたの寝られないの？」

「さっき大丈夫だった？」

「ここに居させて」僕は二段ベッドの脇に蹲った。

なんか、涙

が

、、溢れそうになった、、、、、、

「兄ィちゃん、お父しゃん寝ちゃったよ、、、 泣いてるよ、、、、、、」

「あらどうしたのみんなそろって？秀幸はどうして泣いているの？」

「ユッキ僕達の部屋に来たんだ、〃ここに居させて〃ってベットの脇にしゃがみ込んだと思ったら直ぐに寝ちゃったよ、、、

、、、、泣いてたんだ」

「そっか、それで秀幸も泣いている訳ね」

「ねえお母さん、明るく振る舞えって言われたけど、、、、どうするの、不安じゃ無いの今後の事、、高校私立だし？」

「もちろん不安よ、でもどうしようもないのよ原因の分かっている病気じゃ無いのだから。ただただ支えてあげなければいけないだけよ克幸と同じ中一よ子供なのよ。」

「僕、学校終わったらカッチに勉強教えてあげるよ！上手く教えられるかは解らないけどさあ！」

「それはいいわね！美幸も居るし勉強する環境は悪く無いわね！」

「ええ～私もオ??」

「姉ちゃん何ビビってンだよ！高校生だろ、僕にも算数教えてよ！」

「算数は苦手なの！」

「はあ小四の!？」

「うるさいわネ！もお。でもホントどうなっちゃうのかなあ？」

「きっと焦らない事よ、お父さんが一番焦って混乱しているのだから、先生もおっしゃっていた様に今は下手な刺激は良く無いと思うは、正直お母さんも不安だし慌てている、さっき善かれと思ってクルマでお父さんを連れ出してしまったけれどね、お父さんちょっとだけ嬉しそうだったけれどその後は何も無かったは、、、

まずは落ち着いて状況を受け入れられる様になってからね。・・・・・・・・

そしてお父さんが自分から何か行動を起こす様になってからの話しだと思うのよ。

こんな時だからこそ明るくしなければねえ、

ああ、でも無理する必要はないは普通で良いと思うのよ、

後は　　そうねえ、、ほんの少しの笑顔があれば十分じゃないかしら。」

朝になっていた。

「変な夢エ」と同時に飛び起きると視線の高さにクラついた、、、

鏡に写った姿はやはりおじさんだった。。。。

「やっぱしっ」、腰から崩れそうになるのをなんとかこらえて机に寄り掛かった。

「ふ〜っ。。。。 六時半かァ、どうしよう。。。。」

階段を降りると、みんな慌ただしかった。

「オハヨー ユッキィ」みんなが声を掛けてくれた。

お母さんが、背広をかざして、

「食事が終わったらこれ着てねっ、今日は克幸の入学式なのよ！」と、言った。

「えっ、僕が行くの？」

「約束してたんだよ行くって！ユッキィも楽しみにしてたよ。」 カッチが答える。

テーブルに付くと、トーストと目玉焼き、牛乳が用意されていた。

「ご飯の方がいいなあ」と思いつつ、牛乳を一口。

「ヴァ〜ツッ　なんだこの牛乳？」

「それ豆乳よ」美幸さんが笑って答える。

「トーニユウ！　トーニユ〜って何ィ？」

「豆よ　マメ！　ユッキィ毎日それ飲んでるのよ！」

返す言葉が無かった・・・

まさか背広を着るとは思わなかった。

隣でもカッチが背広を着始める？

「学生服でないの？」

「ブレザーだよ！」

「ブレザー、、だよって、今時ってヤツ？」　ボ〜ッとカッチを見ていた。

「あっ！ユッキィもしかして、ネクタイ結べない？教えてあげるよお」

はずかしながらいなずくしかなかった。

知らない人が見たら、無気味な光景だよなぁ！子供に大人がネクタイの結び方を教わっているのだからさ。そう思いながらも、やらない訳にはいけないので必死にやってみるものの上手く出来ない。

食器洗いをしていたお母さんが「貸して」とネクタイを持ち「ハイあご上げて」と自分の目の前に突然顔のドアップ自分の顔が真っ赤になっているであろう事が直ぐ分かった。

「ハイハイハイッ」と手際良く結び終わると「ちょっと窮屈だけど我慢してね」と言ってホッペに『チュー』された。

「ああ〜ッ」みんな一斉に声をあげ大騒ぎ。僕は初めてのキスに顔が熱くなり全身からドッと汗が噴出し啞然と立ち尽くした。

・・・再び台所へ戻ったその後ろ姿を眺めながら「昨日あんなに泣いていたのに・・・」

そんな事みじんも感じさせない、、どうしてあんな風に振る舞えるのだろお、、、

僕はどうしてもあげられない現実を再確認させられた。

――

〃思い出さなければいけないんだ、みんなの為に頑張らないといけない、、、〃

そんな思いが

沸き出した。

――

美幸さんはお母さんが着替えてきたのを確認すると、〃克幸、ユッキィ、お母さ〜ん、玄関に来て〃と呼ばれた。

〃はい、並んで並んでえ〃と、いいながら、携帯電話を取り出して、何すんのぉ？

「1 + 1 はア？」

「えっ？」 「2」

「にィ」 〃カシャリ〃

「それって電話でしょ！」

「電話ヨ、でもカメラよ！」

「電話なのにカメラなのオ〜ツツ？」 世の中どうなってンだよ。それからみんなで一枚

「ハイッ！チーズ」 〃カシャリ〃

「じゃ頑張って来てねえ、ユッキィ」 美幸さんはカバンを持って家を出た。
僕は引きつり笑いをしながらうなずいた。

お母さんが秀ちゃんに、児童館に行く時はちゃんとカギ掛けてね。それから入学式が終わったら病院によって来るからと、説明していた。

秀ちゃんは、〃ウンウン〃と、返事をしているが話し半分と言う感じで、僕の所に来て、
「ユッキィ帰ったら野球しようォ！」 僕はその誘いには、にっこり笑ってうなずいた。

「さぁ私たちも行きましょうか！」

「えっちょっとッ待てェ、秀ちゃん学校行かないのお？」

「学校は、休みだよ！なんで？」

「休み？どうして、今日何かの日。」

「どーしてって土日は休みに決まってるよ」

「ええっ！？土曜休みって、どーゆー事！」

お母さんが説明してくれた。

「私達の頃・・・あ、今の幸雄君の中学の時代は、それが当たり前で何とも思っていなかったけど〃それが詰め込み教育〃と言われていて、それではいけないと、もう十数年位になるかしら、もう少し〃ゆとり〃を持って子供達を教育しましょうと言う事になったのよ。それで、美幸が小三の年からだったかしら、その〃ゆとり教育〃の一環として、小中学校は、土曜日も、お休みになった訳。」

「ホントにィ！」

すごくビックリした。

「でも親の立場から言わせてもらえれば、とんでもない話しよ、マトモな授業も減っているし学力低下でみんな、騒いでいるのよ！それに、幸雄君の周りで塾に行っている友達なんて知れているでしょう？今塾に行っている子供の数なんてすごいよ。学校で勉強しないで塾で勉強するなんておかしい話よね。」

「お母さんが言っている事が本当ならスゲー変だよなあ。

だいたいにして学校が週休二日なんてとても信じられない、、、」

デモなあ、ウチの親なんて、共働きだしな。 どうしよう、、、

んっっ どうしようなんて、考えたって、、、全然関係ないやア、、、 ハハ・・・

秀ちゃんを残して三人で家を出た。

「見た目は普通の親子だよなあ」と思いつつとても複雑だった。 何せ四ヵ月前に自分自身が入学式をして中学生になったばかりなのに、それがまして四ヵ月前じゃなくて三十三年も経ちまっ

ていると言うのだから到底理解出来ない。

でもこれが現実、ボールを追った夏休みじゃない。

今は春。

校門の立て看板に書いてあるその文字、

平成二十二年度四月吉日

仙台市立 小松島中学校入学式

体育館に入って行くとお父さんの人数にビックリした。

「えっこれ夫婦で参加なの？」

「そう言う訳ではないけれど、私達の頃では考えられなわよねえ、年と共に増えてきたってことかしら。」

そして入学式が始まるとお父さん達は一斉に右手に何かを持って覗き始めた。

「あれ何？」 小声で問いかけると〃ビデオ撮影しているのよ〃と小声で帰って来た。

「ビデオって、８ミリ映写機の事？」

〃そんなモノねえ〃と、笑われた。

手のひらサイズに驚いた。しかも、ほとんどのお父さんがそいつばかり覗き込んでいるではないか。

「アッ、僕、カメラマンだったのォ？」

「違うよ」　そう言って、話し続けた、

「ウチは撮るつもりは始めっから無かったのよ、子供達が幼稚園の頃は、マメに撮っていたけどね！　小学校に入ってから「撮るのは止めよう」って、幸雄君が言ったのよ。　「自分の目でちゃんと観ようって、きちんと頭に入れよう」ってね。」

周りのお父さん達を眺めながら自分が言っただけのセリフにちょっと感心した。と、同時にまたまた現実に引き戻された。

「自分の目で見る」

「これが現実」

カッチ　十二歳　中学一年生の入学式

ぼくは、、、、僕も、佐山幸雄　十二歳、、、、四十過ぎたおじさん、お父さん、、、、

僕も中学一年なのだけど、この前入学したばかりなのに、、、、でも　でも、涙が溢れて止まらなくなった。

入学式を済ませて病院に寄った。

膝を突き合わせ、ひと通り昨晚からの出来事を医者に報告。頭痛、カラダの新たな痛み等も無く、その報告どおり今日の検査でも、脳波も正常、新たな腫れも確認され無かった。

「特別な変化は診られませんが、もう少し様子を診ますか！何か、ほんの少しのキッカケと思うのですよ。無理な刺激は、今はしない方が善いと思っています。」

僕は話を聴きながら思っていた。

僕は四十五歳で記憶が途切れて、

いや違う、

今の頭が絶対普通で、何らかの原因で、このカラダが違っているのだ！

本当は、嘘じゃないかって、嘘であってほしいと・・・・・・・・

やはり受け入れがたい思いが増した、、

—それと警察の方が一応、本人にも、お話を聴きたいと行っているなので体調が善ければ報告に行ってみて下さい。

佐山さんの現状はお話してありますので御心配為さらずに、行けば何かのキッカケになるかも知れませんから、—

そう告げられ、病院を後にした。

我家に戻ると玄関前で秀ちゃんが、野球の準備をして待っていた。

「ユッキィ、兄ィちゃん野球しよォ！」

「OっK、OっK！」と、カッチが答える。

お母さんは、にこやかに、早く着替えて遊んでやって、窮屈だったでしょスーツ！と、言って僕に服を出してくれた。

克幸はダメよっ、今日渡されたモノ全部に名前を書いてプリント確認して、月曜日の準備終わってからにしろさいよ。そう言ってから僕のところに寄って来て、

「これお守りよ！ 胸ポケットに入れといてネッ。」そう言って、巾着を首に掛けてくれた。

秀ちゃんに、中学の時も野球がうまかったのと聞かれ、

「、、？ ああ、、もちろんさ野球部だからねと返事をする。夏休み新人対外戦のレギュラーで、昨日の試合で痛烈なセカンドゴロがイレギュラーで頭に当たって倒れたって訳さ。三十三年前みたいだけどさあ。」

—あの後どうなったのかなあ？ あのボールに手が届いていればなァっ —

「ハイ」 渡されたグローブに愕然とした。

「あ〜ッ グローブ、ヨレヨレだっ！ これ買ったばかりなのに〜ィ」

「だって三十年だよ」 そう言われて改めて月日の流れを感じたと共に、よく三十三年もグローブをとってある事にビックリさせられた。

「おどろいたァ？これ兄ィちゃんのお下がりで、今、僕が使ってるんだ！ ユッキィのは、こっちだよ。」

渡されたグローブは割りと新しく、超カッコ良い感じのヤツで、「なかなかのフィット感だなあ」と、感心した。・・・・・・・・んっ、

「ユッキィのは、こっちだよ。」 自分のだから当たり前の話しか、、、？

でもなんで大人になってんのに新しいグローブ？の、疑問と同時に、ソフトボールがカゴいっぱいに入っているのが目に入る。

「何、コレ？」

「ユッキ日曜日、朝ソフトボールのチームに入っていて、ボール係なんだよ。兄ィちゃんは、いつも一緒に連れて行ってもらって、練習とかも交ぜてもらってるみたい。僕は視たいテレビが有るからたまにしか行かないんだ。」

「僕が、朝ソフトボールをやっている・・・・・・」 とても不思議な感覚だった。

「アッ、金属バットじゃん！すげ～っっ」

「兄ィちゃんが入学祝いにバットとグローブを買ってもらったんだよ。ホラ木のバット昔ユッキィ使ってたヤツ！」

「ア～っ色が剥げ剥げだ、三十三年前か、、、」そして今時は木製バットは珍しいと聞かされて、またまたショック。

「ユッキィ何処投げてンだよお、本当に野球うまいの？お父しゃんは超うまいのにィ！」

「ごめん、ごめん！」 また暴投だ。頭とカラダのバランスがうまくとれない。僕は中学生なのだけど、カラダが大人、いや大人だけど頭の中が中学生？・・・・ とにかく上手く投げられない。

「くっそお～っっ」 「・・・・・・」

「フッ」と、頭をよぎった事にカラダが固まってしまった。

「僕、プロ野球選手になれなかったぁ！」

〃 小学校の時もあんなに頑張って、、、 中学でも気合い入れて部活もしていたのに、
ダメ、、だったぁ、、、、 〃
「ダメだったんだぁ！」

グローブを高くかざし地面に叩き付けようとしたけど、秀ちゃんの驚いた顔が目にとまった。
僕はグローブをその場に置き走り出した。
「ユッキどこ行くの？待ってェ！」の声に答えられずにその場を逃れようと走り出した。
その場を逃れたからと言って、どおって事ないのは直ぐに気付いたけど、どうにも心のやり場と
言うか、なんと言うか、どうしようの無い思いに襲われた。

「お母ちゃん兄ィちゃん！ユッキがねえユッキがキャッチボールしてたら突然、
〃 僕プロ野球選手になれなかったんだって 〃 言って、走って行っちゃって、それで呼び止めたんだけどねっ・・・・・・・・」

お母さんは半ベソかいている秀幸をなだめすかしながら克幸に野球用具を秀幸と片付けて家で待っているように指示、そして「大丈夫心配いらないから」そう言って家を後にした。

気付くと公園のベンチに座っていた。お日様がだいぶ傾いているように思えた。僕はどこをどう来たのか、ここにどのくらい居るのかも解らなかった。 〃 僕は、プロ野球選手になれなかった・・・・・・・・〃でも、本当に僕は大人なのか？それをマトモに受け入れられない自分の思いの方が強く、僕は途方に暮れていた・・・・・・・・

「ユッキィ、みっけェ！」 その声に顔を上げると秀ちゃんのお母さんだった。
僕を探しに来たのだろうか？

にこやかな表情で僕の顔を覗き込みながら

「ユッキなんて呼ぶの十何年振りかなあ」そう言って隣に腰掛けて優しい口調で話し続けた。

「ユッキさあ、突然将来の夢が叶わなかったと知ればショックよね、今の自分も受け入れられないのかも知れないけれど、」

「、、、、」

「初めての夢が叶うなんて、ほんの一握りよ それにユッキはその後ちゃんと生きて、私が居て、子供達が居て、帰る家が在って、ユッキの歩んで来た道は全然悲観するような事は何も無いのよ。一生懸命頑張ってきてそれで今が在るのだから。」

どうして良いのか解らなかった。

どう振る舞えば良いのか、、、、

「僕大人なのかも知れないけれど中一なんだ、もしかしたら頭の中の記憶出て来ないのじゃなくて頭の中に残って無いんじゃないかな？」

「そんな心配は入らないは、脳にダメージはないと先生も言っていたし、何かしらのちょっとした原因でそこにアクセス出来ていないだけよ。」

その言葉に思わず語気を強めてしまった。

「でもダメージがあったから記憶が無いのだよね！」

「、、、、、、」

お母さんの表情はなんとも言い様のないビククリしたような、、悲しげなそんな感じに見えた。

・・・・そうだよこんな事お母さんに言っても仕方ないんだ、、思わず出たその言葉に後悔していた。

沈黙を破ったのはお母さんだった。

「今この状況を素直に受け入れる事が先決だと思う、そして焦らずこれからの出来事をクリアしていく事が良々のじゃないかしら。そうすればきっと新たな情報が閉ざされた今までの記憶を引っぱりだしてくれるはずよ。大丈夫、記憶は戻る。」

振り絞るように発せられた声は涙声だった、そして優しく抱き寄せられた。

僕はそれに身を委ねるしか無かった。

「ユッキィ、お母しゃん」と、後ろから声がした。

振り返ると美幸さん、カッチ、秀ちゃんが自転車で近づいて来た。

「ユッキィよくこんな所まで来たね。」そう言ったカッチと秀ちゃんはだいぶくたびれているように見えた。

「遠いのお？」

「結構ね」半分笑いながらの返事がかえってきた。

「さっきお腹が、〃グーッ〃って言ってさあ、ユッキィもお腹空いたんじゃない？」

そう聞かれて突然そんな気になった。

「ねエちゃんが怪しい料理作ってたよ。」秀ちゃんが話しに加わる。

「失礼ね！お母さんが途中にしていたヤツに手を加えていただけよ。」

「それが怪しいんじゃないん普段なんにもしないのに。」

「何よお、それはあんたでしょ！」

「今日はねえ克幸の入学祝いだからご馳走作ってたのよ。」

「エエッ、じゃねえちゃん手加えてたからがご馳走台無しじゃん」

「こら！」

「いいから、いいから、早く帰ってゴハンにしようよお！」 カッチが割って入った。

「帰りましょうユッキ私達の家！」

みんなにこやかだった。

何かとても救われた気がした。

もう、けっこうな道程を戻って気になった。

「ねえ、僕の居場所、どうしてみんな分かったの？」

「ユッキお守り持っていてくれたでしょ」 お母さんの答えに戸惑った。

「えっ？お守りで解るの？」

驚きながら胸ポケットから巾着を取り出すと、なんと携帯電話と言うヤツでは無いか！

不思議そうな僕の顔を察してか美幸さんが自分の携帯電話をかざして

「GPS付きなのよ、それで居場所が解るのよ」そう話した。

「ジーピーエス？で、居場所が解る？って、どーゆー事ォ？」

「お母さんがGPSでユッキ見つけてから私のケータイにメールくれたのよ。」

「メール？メールって何ィ？ ジーピーエスってえ、、、」

「ここに居るよって手紙くれたのよ。」

「えーっっ、 電話で、手紙が、送れるのォ〜！？」

昨日の夕食に比べかなり和やかな様に感じたカッチの入学祝いと言う事もあってそんな雰囲気なのだろうか、ご馳走も手伝っているからだろうか、、、

でも落ち着いただけに逆に居心地が悪かった。やはり普通じゃ無いんだよな、、、
きっとみんなにとっては見た目だけのお父さんだし、、、今の僕にとっての家族って両親は実家だし、、、幸恵も居ないし、、、
これ家族だけど、、、本当の家族じゃ無い？ そんな事は口には出せないけれど、やはり違和感は拭えない、、

カッチや秀ちゃんは友達にしか思えないし、美幸さんやお母さんもやはり違う、、、

「ユッキィ！ ユッキィ何飲む？ ケーキだって。」

「ア、えっと、、、みんなと同じでお願いします。」

「ユッキィみんなと同じって言ったってみんなバラバラだよ、コーヒーに紅茶、サイダーとダイエット茶」

「ああ、、、それじゃ紅茶をお願いします。」

秀ちゃんが笑いながらテレビをつけると野球中継らしかった。

〃 ジャイアンツとドコ？と聞くとイーグルスとロッテだよと言う返事が帰って来た？？〃

「えっイーグルスッテ何？」

「イーグルスは仙台のチームだよ！」

「えっ？仙台はロッテオリオンズでしょ？」思わず聞き返した。

「それは昔だよ今は千葉だよ千葉ロッテマリーンズっていう名前に変わってるんだ。」

「何それ？」にわかに信じがたかった、、、

〃イーグルスはね近鉄バッファローズっていうトコが無くなって楽天球団が仙台にホームチームを構えたんだ、それが東北楽天ゴールデンイーグルスだよ。〃ってそれホントなの！？、、、

「あの、、、じゃあ王選手は？・・・・・・・・」

「王さんは二年位前までソフトバンクホークスの監督していたけど今はやって無いよ。」

「えっホークスって野村選手の居る南海ホークスじゃ無いの？」

「それも親会社が変わっちゃてるよ！ちなみにノムさんは去年までイーグルスの監督やって大人気だったよ。もひとつおまけに王さんは通算ホームラン868本打って世界のホームラン王だよ！」

「ま、、、まさかそんなウソでしょう？だってまだ756本も打って無いんだよ今月中に出るかどうかって今話題なのに、、、！」

「アァホラホラ今日のゲスト解説ノムさん！」 カッチにそう言われて映像を直視するとそこに映し出された顔はまぎれも無く歳をとった野村選手だった、、、
言葉を失った・・・・・・・・

やっぱりそうなんだ三十三年経ってるんだ、、、、、思わぬ所から時代の流れを実感する事になった、、、急に力が抜けていった、、、、

「ユッキィ大丈夫疲れた？」のお母さんの声に「ハッ」と我に帰った。

野球中継が終わっのか？

揺るぎない現実を目の当たりにして試合なんて全然観て無かった、、、

「ふう～」と大きな溜息が出た、、、

お風呂から上がって来たカッチが近づいて来て、

「ユッキィ明日ソフトだからね、六時に起きて行くよ！」そう言われうなずいた。

明日のソフトは春期トーナメント大会の準決勝、決勝が在るとの事だった。

「チーム強いんだ？」

「先週対戦相手にも恵まれたけど、そこそこ強いよ。ユッキィはねえ、普通３番でサードだよ。

先週二回戦で決勝タイムリー打ったんだよ。」

「へ～っ、すごいねえ！」

何かとっても、わくわくしている自分がそこに居た。

カッチは、＼じゃオヤスミ＼ そう言って、階段を登って行った。

それと入れ替わってお母さんが僕の所に寄って来て寝られそうも無かったらその部屋を覗いてみてと声を掛けてくれた。

僕の部屋・・・・・・・・

さすが昨日はためらったらしいが、＼気が向いたら＼との事だった。

部屋に入ると大人な感じだった。

パソコンってヤツもあり、こんな本読むの？そう思えるヤツがずらりと並んでいた。

そして子供部屋とはまた別の僕が描いたらしきイラストが掛けてあり机の上には小中高大学の各卒業アルバムが開いて置いてあった。

〃小学校のはそりゃこの前もらったばかりだからなあ、、、〃と、横目で流した。

その他のアルバムに恐る恐る目を通すと、確かに僕らしき写真と僕の名前が記されてあった。

背中が〃ゾゾッ〃とした。

ビートルと、僕と、お母、、美子さん、、、

黄色いやツも二人で写っている。

〃ウッ〃

結婚写真だ、、、、

これが僕の未来、、いや、現実？

、、、、過去。

やはり大人なんだ僕は

子供では、いられないんだ・ ・ ・ ・ ・ 記憶

本当に僕の未来が、 この頭の中に、あるのだろうか。

記憶って、、、

記憶を取り戻せば済むのだろうけど、、、

記憶が全て戻るのだろうか？

途切れて戻るのだろうか、、、

戻らなかったら、、、

これから、、、

お父さん、お母さん、、、僕はどうすればいいんだ。

、、、、あんなジィちゃんバーちゃんになっちゃって、、、、

何もしてあげて無いのにあんなに歳とっちゃって、、、

んっ、してあげて無い事は無いのか、

自分の記憶が無いだけでみんなの中には僕の年月があるのか？
でも僕には無い。

さてよ、、、

でもこのまま記憶が戻らなくて時を過ごしたらもしかして別の人格の人間になっちゃう、
僕は僕であり続けるだろうけど、、、
お母さんや美幸さんやカッチや秀ちゃんにとって僕の存在は別の人間になってしまうの
だろうか？

これからの人生が、人格が、家族の意義が変わってしまう？・・・・・・・・
・・・・・・・・記憶を取り戻さなくちゃ、、、

——「大丈夫、記憶は戻る。」——
お母さんの言葉が頭に浮かんだ。

「オハヨー ユッキィ」

「あっカッチお早うー」

「昨日は眠れた？」

「うん！いくらか眠れたかなあ、、、今朝は結構良い感じかな。」

カッチに起こされて台所に行くと二人分の朝食が用意されていた。

「いつもはねえ、僕がユッキィに起こされてユッキィが朝食用意してくれるんだけどお母さんに頼んじゃった。でも今日は自分で起きれたよ！」

「おかあさんは？」

「町内の朝清掃でもう出かけちゃったんだ。送ってあげられないからね一ちゃんの自転車使って良いって言われたよ！」

「会場遠いの？」

「たいした距離じゃ無いけどボールあるでしょ、昨日のうちにでもチームの誰かに頼めば良かったんだけど慌ただしくてそんな事思い付く暇も無かったからね。顔を洗ってから朝食を二人で食べる、その後カッチにユニホームを渡される。

「えっ1番なの、ヤッタすごい王選手と一緒にカッコいいィ！」

「ユッキィがねチームに入った時にたまたま空いてた番号で即決したってその時言ってたよ。」

「へっ、すごいラッキィ！！ あれ？カッチは着替ええないの。」

「無いよ、選手登録出来るのは社会人で年齢制限があるんだよ！僕は、練習に交ぜてもらっているけど試合には出られないんだよ。 もっとも、全然レベルが違うから出たくともお話にならないけどさあ。」

〃 そんなものなのかあ〜〃 そう感心しながら着替えをして美幸さんの自転車を借り荷台にボールを積み込んで二人でグラウンドに向かった。

「カッチの自転車すごいね！自転車にサスペンションが付いているなんてビックリだよォ」

「いいでしょォ、ユッキィが買ってくれたんだよ！」

「？！ だよねえ、、、、」

会場に着くと同じユニホームを着た人達が寄って来て挨拶を交しひとしきり一昨日の話しになった。

「佐山さん事故、大丈夫でした？」

「聞きましたよ、小学生抱えて助けたって、幸雄君お父さんスゴイね！」

「クルマどうしたんですか？やはりどこか、調子悪いですか？」

「連絡もらえば迎えに行ったのにボール持つの大変だったでしょう。」

・・・・・・・・話しは

尽きない。

「あれッ、佐山さん、、どうしましたか？」

僕の反応の悪さに気付いてか、話を僕に振ってきた。

僕は愛想笑いするしか無かった。

それを目の当たりにして、カッチが話し出した。

「あのねエ、お父さんカラダなんとも無いんだけど、実は事故が原因で記憶が中学一年生から途切れていて、みんなの事が解らないんでス。」

さすがにみんな一歩退いた。

一瞬静まり返って驚きを隠せない様だった。

「佐山さん！ホント？ 私の事解らない。」

「ゴメンなさい、誰の名前も、、、」

いっきに周りの空気が重くなった。

が、それを振り払うかのように後ろから審判の声が掛かった。

「試合は準決勝Aブロックが南側、Bブロックが北側、それぞれ十五分練習を開始して下さい。

試合は八時からです。」

相手がグラウンドに入った、僕達はベンチ前で柔軟体操キャッチボール、トスバッティング、

「練習時間終了交代して下さい」の審判の声でグラウンドへ入って守備練習、監督に言われセカンドに入る最初のノックでちょっとビビったがその後、超ユルユルのノックが飛んできて、みんなの気遣いを感じつつも緊張した。

「ふう～」昨日秀ちゃんとチョコッとキャッチボールをしておいて良かった。何とか暴投無しで納まった。

三塁ベンチへ戻りエンジンを組んだ。

「今日は3番が居ないから厳しい試合になるか」そう言いなが監督はメンバーを発表。メンバーから外れた、カッチは悔しがっていたが自分では納得していた。

「いよいよかあ！」

ホームベースをはさんで挨拶し初回の攻撃、しかしあっさり三人で打ち取られてしまった。

「あーっもォ」カッチはとても残念そう。

「さあ切り替えて行くよ」の声にみんな守備位置へ散って行った。

僕とカッチは二人でベンチに残され戦況を見守るしかなかった。

「ああ監督ってピッチャーなんだァ！」

「そーだよ監督は背番号30番、ちなみにショートの人がキャプテンで背番号は10番っ決まっているんだよ！」

「へえ〜そーなんだあ。それからさっきから気になってたんだけどあのオレンジのファーストベースは何い！？」

「あああれ、ソフトは塁間が短くてクロスプレーになり易く危険だからそれを避けるためにバッターはオレンジベースを守備は普通の白ベースを踏むんだよ！ついでに盗塁は良いけどリードは無しでピッチャーが投げるまでベースを離れちゃいけないんだよ！」

「へえ〜なるほどねえ！？」

「プレイボール」の声で試合再開。

ただ観て応援なんてつまんないと思いつつも試合が進むに連れ、「打つ」「走る」「投げる」どれを取ってもカッチが朝言っていたレベルの違いってヤツを痛感、試合にのめり込んで行った。

「カッチあれ、みんな良く打つねえ！」

「でしょ！打てないヨねえ、でもユッキ、普通なら打つよ！」

「普通ならねえ、、、」「か、

その後、一点を重ねるシーソーゲーム ポテンヒットになろうかと言う打球をセカンド、ライト、センターが交錯したが何とかキャッチ、一点を追う展開で最終回を迎える事になった。しかしセンターが足を挫いたようで、両脇を支えられてベンチに戻ってきた。

「ん、、、」

監督はみんなを前にして、「この試合、棄権しようかと思う。」「と言い出した。

「えっ？どーして！」カッチが、ビックリして聞き返した。

答えは簡単だった。

メンバーが足りない。

ユニホームを着ているメンバーは、そう言えば十人。予定の一人は二試合目に間に合えばとの事、もう一人は突然の仕事で朝キャンセルの電話が入った。

当然、僕も頭数に入れていたのでそれ以上はメンバーに声を掛け無かったとの事だった。

ところが、その僕が見た目が大人でも中学一年生と知ってしまった以上試合に出すのは余りにも危険と言う事のようなのだ。

すでに、みんな納得している様子だった。

「そんなぁ」 カッチは食い下がった。

「克幸君、練習のとき痛烈なゴロがたまに来ると逃げるでしょ！今の佐山さんも同じだよ、」ケガ無く、楽しく！」それが大前提だよ。解るだろ！」カッチは返す言葉を探している様だった。

「僕出ます！」のセリフにみんな驚いた。

「ここでやめるのは悔しいですね！」

「しかしネェ佐山さん」と、口をはさまれたが、ここで押し切らないと逆に説得されると思い話し続けた。

「守備はこの回点採ってからの話だし、もう最終回でボール飛んで来ないでスよ。ネッ、やりましょう。もし来たら、逃げちゃいますから！　　＼楽しく、そして、ケガ無く＼でしヨ！」カッチが笑った。　みんなも笑ってくれた。

「絶対に無理はしないで下さいよ！」と、念を押され、僕はうなずいた。

「やったあ！」とカッチも喜んだ。

エンジンを組んだ。

「さぁ最終回、まず一点！焦らず良く見て」　監督が指示を出す。

「最後まで楽しんで」　とキャプテンも続く。

しかし、どうしたものか？と、実は考えていた。

「ユッキ次だよ」カッチに教えられて、ネクストバッターズサークルへ向かった。

「出ますと言ったものの、どう考えてみても今の自分では、どうしようも無い現実がそこにあるだけだった。」

「ヤッタァ、つながったよユッキ」その声に、ハッとする。

「ワンアウトー、二塁、かぁ、、、よしっ、ここは死ぬ気で絶対送るぞ！」と、気合いを入れている所へ監督が寄ってきた。

「佐山さん、初球ど真ン中、思いっきり叩いて。」

小声で言う言葉に、「エッ？」と、思わず聞き返した。

「相手のピッチャーは佐山さんを、ただの控えとしか観てないよ、ここで決めるのにバントさせてゲッツーを採りに来る、それだけの守備力があるチームだ。」

バントの構えは要らない初球が勝負、強く叩いて！　大丈夫　楽しんで。」

「はい！　ケガ無く楽しく」

周りがよく見えた。

相手ピッチャーは、内野守備位置を指示。　〃　なるほど納得、初球勝負！　〃

〃　いや、必ず勝つ！　〃

ピッチャーの投球と同時にサード、ファーストが猛ダッシュ、セカンド、ショートは一、三塁へ。

〃　来たッ、ど真ん中、ゆるい！　〃

思いっ切り叩いた。

「あ〜っっ」

詰まったあ、、、　手が痺れた。

チカラ無くふらふらと上ったその打球ちょうどセカンドベース辺り誰も居ない所に落ちてセンターの方へ転がった。

「いったあ！」

セカンドランナーは三塁ベースを蹴っていききにホームイン。

「ラッキー」「同点だ！」

「よっしゃあ～」 「助かったア～」

もう、超最高に舞い上がった。ベンチでもみんな大喜び、カッチも大きく手を振ってくれていた。

押せ押せムードの中、次のバッターはきっちり送りツーアウト二、三塁、セカンドベースまで来てしまった。間髪入れず3番バッターは左中間へ打った！

〃 逆転〃 サードへ向かう僕にコーチャーがグルグル手を回す、もう一点！

サードベースを蹴ったが視線がグラつく足が纏れるっホームが遠いっ

「右、右ッ滑れ～っっ！」のジェスチャーに

〃 アウトーッ〃

「ふう～っ」

滑り込む以前にベース手前で転けてあっさりキャッチャーにタッチされてしまった。

でもみんな集まってきて握手、ハイタッチの嵐、カッチが飲み物とグローブを渡してくれた。
そいつを一気に飲み干してひと息付けた。
「！ スポーツドリンクって、、、おいしい」
「さあ、最後の守り、集中集中、8番から確実にトップ切るよォ」
キャプテンの声にみんなグラウンドへ散った。

監督が主審に守備位置の変更を告げピッチャーマウンドへ向かった。
セカンドの守備に付くと、練習と同じはずなのにグラウンドがすごく広く見えた。
「ファーストまで遠いなあ、ボールが届くだろうか？」
ベンチに居るカッチも豆粒の様に見えた。
相手チームはベンチ前に集まっていた。みんな僕を見ているような・・・・・・
そいつは気のせいかな？

「あれっ、お母さん達い、、、いつから居たのだろ？いつも観に来ているのか？・・・・

さっきのヤツも観ていたのかなあ！？」

「プレイボール」主審のコール、初球のあたりは、一、二塁間を抜けて行った。

「チキショー、ただのセカンドゴロだよ。」足が全然動かなくて呆然とした。

そこに、キャプテンが寄ってきて声を掛けてくれた。

「大丈夫、落ち着いて！　ひとつずつ。バントの時はファーストへ」の指示に、うなずいた。

投球と同時にファースへ向かった。

「打ってきたあ」セカンド正面のゴロは外野へ転がった。

「しまったあ」狙われた。

「バントの時はファーストへ」　ボンミスだ・・・・・・・・

みんなピッチャーの所じゃなく僕の所に集まってきた。カッチもベンチで心配そうにしているのが見えた。

「佐山さん、落ち着いて！」

「すいません」の声をさえぎる様にキャプテンが「まだまだこれから」気合いを入れる。

しかし1番バッターに、きっちり送られワンアウト二、三塁、ピンチが更に拡がった。

〃サヨナラのランナーが二塁に行ってしまった。〃

僕はピッチャーマウンドに行きボールを渡すと、監督は笑ってワンアウトと一本指を翳した。

そして次は今日三安打の2番バッター、最悪のパターンにってしまったと自分で招いたピンチに緊張していると監督が球審に向かって〃敬遠〃と告げた。

〃エッ！？〃と僕は横目にショートを見るとキャプテンが寄って来て〃ソフトは投げなくとも宣言すればそれで良いんだよ〃と教えてくれた。

〃ヘエ〜〃と感心したが直ぐに『本当かァ』そりゃぁファーストランナーは関係ないからセオリ一だけどさぁ、、、

〃 ワンアウト満塁で、今日抑えているとは言え 3、4 番との対戦に望むのはすごいと別な意味で感心している間に今日全然タイミングの合って無い 3 番をまた三振に斬って採った。

〃 すっスゴイ、、、〃

何か詰め将棋でも楽しんでいるかの様にさえ感じた。

これでツーアウト満塁、今日 4 番は全て大飛球だがチョイト芯を外して打ち採っている。

この場面でも打たせて採るのかァ？

〃 ツーアウトオー〃 みんなで声を掛合う。

キャプテンがまたまた僕の所に寄ってきて、

「佐山さん落ち着いて、来たらどこでも近いところ、まだ一点あるから！ 危ない時は逃げて下さいよ。」

「ハイ」 返事をするものの、もうカラダはガチガチに固まっていた。

「ケガ無く楽しくだよ」

離れ際グローブで 〃 ポン〃 とお尻をたたかれスーッとカラダの力が抜けた。

監督もこっちを見て大丈夫と言っている表情が読みとれた、んっカッチ不安そうだなぁ大丈夫心配入らないよ！

ああ、、、お母さん笑顔だぁ！〃ふふっ、スマイルスマイルよぉしい！〃

最後の最後、美味しい所に回ってきた相手の4番もそうそう黙っちゃいないだろう。

一球目の内角ストレートを思いっきり引っ張られた。

〃やられたぁ〃

カキーンと快音を残したライン際の大飛球は見る見る切れて行った。

思わず喉が鳴った。

〃少し抜いたのかぁ〃

球審からボールを受け取る監督は予定道理って感じで涼しい顔をしてまた僕に微笑んだ。

二球目投じたストレートはキャッチャーが外角低め構たミットにビッシッと納まった。

〃すごい〃 アッと言う間に追い込んだ。

バッターは球審に、そりゃ無いだろうって感じでバッターボックスを外してアピール、しかし、受け入れられる訳が無い。

ピッチャーの思惑道理って感じか！

4番がバッターボックスへ戻ると間髪入れず、3球目、内角高めストレート、バッターは尻餅を付いた。

〃 フィーッ、シビレル・・・・・・・・〃

四球目が勝負かァ、
チェンジアップにバットが空を斬った。

〃 ヤッタァッッ 〃 一瞬歓声が上がったが、キャッチャーミットからボールが溢れた。

「ファール」球審の声に監督の表情が一変。明らかに決めに行った、相手も四番、そう簡単には終わらせてくれないようだ。もうひと踏ん張り、どちらも譲れない。

〃 遊び球はもう無いだろうと思えた。〃

次の一球で勝負が決まる！ 球場全体が、緊張に包まれた感じだった。

「ワンボール、ツーストライク！」球審の声に、ゲーム再開。

五球目、渾身の力を込めたストレート 〃 キン！ 〃 快音を放った強烈な打球は、僕の正面へ、

「にげろーっっ」と、一斉に声が掛かるが、無理だっ。

腰を落して構えるのが精一杯・・・

手前でバウンドした打球はグローブを掠め頭に直撃、跳ね上がった。

腰から崩れ落ちそうになるのを必死で堪えたがボールは掴めない。

「さやまさあ〜ん」

「佐山さん」

意識が遠ざかる・・・

青空が見えた・・・

ギラギラ の 太陽、、、

白球 が 舞った、、、

「お父さあーんっ」

「お父しゃん」

「お父さんっ」

「あなたっ」

〃 あっ！ 〃 とっさに、グローブでボールを右に叩いた。

「ナイス！」 とキャプテンの声がしたような・・・

なにやら話し声が頭の上から聞えていた。

目覚めると、ベッドに寝ている様だった。

「アッ気付いたよォ、みんなぁ！」

「ユッキ大丈夫？」

「ユッキ」

「ん、アーう、何だ頭が痛い、、、相当打ったのか、、、あっ、子供は、子供は大丈夫かァ？」

「えっユッキ子供って？」秀幸が聞き返しみんな不思議そうな顔をしている。

「どうしたんだ、突然みんな〃ユッキ〃って？お母さんにしか呼ばれた事無いのに！」

それまでの、みんなの表情が一変、笑顔に変わった。

〃お父さん、いくつ！〃と、娘が突然聞いてきた、何を言い出すかと思えば・・・・・・・・

「お父さんは四十五歳に決まっているだろ」

「ヤッター」

「戻ったァ」

〃やった、戻った〃って、どーゆー事？

一、いでで、頭が、・・・・？頭を抱え込むと、何故かユニホームを着ているではないか？

「なんでユニホーム着てるんだァ？」

「お父さん覚えてないの。」

「覚えてないのってどういう意味？みんなさっきから変だぞ！　　一いででっ、、、
クルマが突っ込んできて、それで跳ねられたんだろ。

」

「お父さん、その後！」

「その後？その後も、この後も、今だろっ」

〃今日、日曜日だよ〃の返答に啞然とする。

「えっっ、ニチヨォッ

．．．．．

ってえ　事は、丸二日！？　寝てたのォ？

お前の入学式は　っ、、？？

なんで、このユニホーム？　　・・・・なっ　何？」

医者らしき人が、妻に話しかけた。

「記憶は、どうやら戻ったようですね。 この二日間で、抜けているようですが。」

．．．．．妻が涙を浮かべている。みんなは相当喜んでいるようだが？ よく解らん。

「全然善くないだろ。 お父さん、克幸の入学式に、行けなかったんじゃないかぁ！」

「お父さんホラッ！」と、娘に差し出された携帯電話に〃ギョッ〃とした。

何故？

妻と、克幸、そして私が写っているではないか。

「どーゆー事？」

「お父ちゃんハイ！」と、秀幸に差し出された物は、ソフトボールの優勝カップ！

「えっ？何ィ？ どうしたの これ！」

玄関を出ると、春の柔らかな日射しが暖かく、とても心地よい。

「アッッ待ってよお！」

「どーしたんだ、お前達」その問いかけに、子供達はみんな笑っている。

「あっ、ほら桜一輪咲いてるわよ！」

「あら咲いたのね」

「一、二、三、、、四、、、かな、、、！？」

「アッあそこ！もいっこミッケ、五輪咲いてる！」

「おオスゴイじゃないか。」

妻に見送られ、いつも、、の如く、、、、の出勤。

四人揃って我家を後にする。

美幸はスクールバスに乗り込みながら

「じゃねえお父さん！」と、投げキッス。三人で思わず顔を見合わせ、見送り、

「兄ちゃん！姉ちゃんさあお父さんに勉強教えなくて済んで機嫌いいのかぁ？」

「そうかもな！」

「お？なんだお父さんに勉強って？」

「なんでも無いよお」

「こっちの話しィ」 秀幸と克幸はニコニコ顔でバス停を後にする。

秀幸が振り返りざま 〃 じゃねえユツキィ 帰ったら野球しようねえ 〃 と、舌をだし、笑って手を振る。克幸も笑っている。

〃 何、言てンだか 〃

．． ．． ．． 　ん、

手を振る私の脳裏に 〃 フッ 〃 と掠めたもの．．．．

〃 僕達の未来。 〃

僕達の未来（時の迷い子）

<http://p.booklog.jp/book/48040>

著者 : kiiroioto

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kiiroioto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48040>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48040>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.